

制疎開の範囲を四つに区分し担当の学校を定める」ことを提案。この事は割合容易に決まった。

「何処の学校が何処を担当するか」で討議が続き、また堂々巡りである。

私は「何時まで討議しても結論は出ない。この道路より東の学校はこより東に向かって鶴見橋の方向へ。西の学校は西本川方向へ向かうではないか、皆どうか」と、意見を求めた。

「この様に分担し、南北はそのグループで決めたら良いのではないか」と提案して決定された。

翌日より真夏の炎天の下、学徒全員は空腹を耐え汗をかき、家を壊し、材石を運び、百メートルの防火道路の建設に着手した。

家を壊す作業の中、瓦の取り外し

は、大人が担当。壁を打ち抜く。最後まで残す柱は切断禁止のマークが付けられる。柱は斜めに切断する。準備が出来たら、上棟に数本のロープを掛けて五、六十人で引つ張る。「ヨイショ、ヨイショ」の掛け声で。土煙を上げて家は倒壊する。材木と石を区分して整理する。

連日この様な建物疎開が続けられていた。沖縄戦局は急を告げ、その上空を日本本土より沖縄救援の特別攻撃機が、護衛戦闘機に導かれて一路沖縄へ。続いて六月にはB-29の呉夜間大空襲があり炎上の明かりが広島より見える。数日して呉を通る。呉駅から見て平地部は完全に消失、周辺の小高き山の中腹まで延焼している。

また沖縄の戦闘もアメリカ五十八機動部隊の物量戦に対抗出来ず、沖

繩守備隊玉砕となり我が国は南方との海上交通も絶たれ、戦局は急速に悪化。

私は七月に、学徒再動員を受けてこの作業より離れたが、後輩が進行状況を毎日報告してくれた。

「東に進んだ学校は、鶴見橋の河畔に迫っている。西に進んだ学校も元安川を越え本川河畔に到達しつつある」と。

白神社境内で建物疎開の範囲決定に当たり私の提案が採用されて作業に着手したが、私のこの提案が、建物疎開に従事した広島市内全中等学校の生徒六千二百人の半数以上の生徒に対し、世界最初の原爆被爆の犠牲者となる時間が、刻々と迫っていることを知らなかった。

昭和二十年七月末、アメリカ機は広島市に伝単（宣伝ビラ）を投下。